

長春は 虚しいほど広い 帝都建設の夢の跡

まちあるきの考古学



長春のまちあるきは「疲れた」の一言でした。
ヒューマンスケールを遥かに超えた広大さ。
図上でみる都市プランは実に見事です、人間が住まうには虚しいほどに広い。

大同広場(現人民広場)は外周1kmに及ぶ巨大なロータリーです。
その広場から四方に伸びる街路は、中央に緑道をもつほど幅広く、どこまでも一直線に伸びています。街路沿いには、高い鉄柵がどこまでも続き、道路沿いの高木の林越しに、満州時代の巨大な石造建築が見え隠れしています。

幹線街路に面した巨大建築は、どれも広大な敷地に悠然と建ち、それ以上に大きく成長した街路樹と庭木の高木の緑に埋没しています。

満洲帝国が建国された時、長春は帝都として建設され「新京」と呼ばれました。
「五族協和」「王道楽土」、当時日本の掲げた満州支配のスローガンを具現化する帝都デザインが模索されたのです。

新たな都市デザインに挑戦したのが、日本の若手技術者達でした。
都市設計立案に携わった満鉄土木技術者の加藤与之吉、長春ヤマトホテルを設計した市田菊次郎、国務院の設計担当は石井達郎。彼らは皆、30才前後のエリート技術者でした。

当時、都市建設を任された満鉄の総裁は後藤新平。明治期における日本都市計画黎明期の中心人物で、東京市区改正の推進者でもあります。彼のもとで新進気鋭の若手都市計画家が活躍したのです。

彼ら若手エリート技術者は何を夢見て都市デザインしたのか。
彼らが自らの意思でそうしたのか、誰かが彼らにそう指示したのか。
彼らの描いた設計図も、いまに残る広大な街並みも、何も応えてはくれません。



その奇抜さは 満州要素を取り入れた 和洋折衷建築

広大な長春の街に点在する、戦前に建てられた建築物もまた巨大です。そして、その奇抜なデザインが目を引きまします。満州の建築要素を取り入れた和洋折衷建築、といえるでしょうか。



旧皇帝居宅



旧関東軍司令部



旧経済部庁舎



左: 街に残る旧満州帝国の官衙建築。

右: 旧満州帝国新宮殿（現地質宮）
闕の様式で、縦長窓は西欧建築風、瓦葺大屋根は日本の寺院建築を彷彿させる。



満州帝国 皇帝居宅

建築中の長春駅ビル。（下写真）
長春の建築様式をしっかりと踏襲しています。
モニュメンタル、闕、極東と西欧の折衷、そして屋根にはステップゲーブルを立上げています。



旧国務院庁舎
長春官衙建築の象徴的存在ですが、西洋と中国の古典建築がもっとも自然に融合した形態です。
日本の国会議事堂にも似ています。



満州の建築要素は、正面建物から両翼を広げた「闕（けつ）」に代表されます。闕とは、古代中国の宮殿、祠廟、陵墓などで門前の両脇に張り出して左右対称に設けられた望楼のことです。旧満州国官衙の建築物は、ほぼ全てこの形式をとっています。そして、中央正面の瓦葺の勾配屋根は、日本の寺院や城郭を彷彿させます。

大連やハルビンなどの本格的な西洋建築ではなく、市井の中国人職人が見よう見まねで建築した中華バロック様式でもありません。正統な西欧建築を学んだ新進気鋭の若手日本人建築家が、西欧列強に日本の先進性をアピールしつつ、満州独自の歴史文化を取り入れた新しい建築様式を提案したものです。従来の西洋建築史の観点から、奇抜と一言で語るのは誤りなのかもしれません。

いまの街の形になった理由

大連からハルビンに通じる鉄道は、長春駅でスイッチターンしています。これは、鉄道による満州支配を進めた日本とロシアが、長春をその境界としたことに起因しています。

ロシアが清国から得た鉄道権益のうち、長春以南を日本が引き継ぎます。しかし、シベリア鉄道の延長として敷設された東清鉄道と、欧米列強が中国内に敷設した鉄道を延伸した南満州鉄道とでは、軌道幅が違っていました。軌道幅の異なる両鉄道は、新たに設けた鉄道駅を接続点として、直通列車が走ることはなく、長春駅で乗客は乗り換え、荷物は積替えられたのです。

満州事変(1931)の翌年、満洲国が建国されました。首都に選ばれたのは長春で、新京と改称されます。当時の満州地域の中心都市は、奉天(現瀋陽)や吉林でしたが、あえて一都市だった長春が選ばれます。軍閥等の既存勢力の拠点をあえて避けたと考えられています。

満州事変時、長春には3つの街が成立していました。

一つは旧長春城址。井通河を背に城壁で囲まれた満洲地域に見られる一般的な城址です。長春駅を囲むように鉄道附属地が広がっていて、南側の附属地は日露戦争後に日本が引き継いだ日本人街でした。それと城址との間には、清国が設定した中国人街がありました。

これら既存の街との整合を図りつつ、南西部の未開発地に新都が拓かれました。

長春駅から南下する大路(現人民大街)を大きく延長し、満洲国の年号をとって大同大街と命名、中心に広大な大同広場を配します。これに並行するもう一つの都市軸として、皇帝宮殿から南湖につづく順天大街(現新民大街)を配置して、沿道に新官庁街を建設しました。

このような都市建設の経過をたどったため、長春市街地は、これといった中心地区を持つこともなく、大きく間延びした形になりました。

右の航空写真からうかがえる新たな帝都建設プランは見事です。しかし、それは図上でのこと。路上を歩くと、その虚しいほどの広さに、ただ疲れるばかりでした。

